

共同利用・共同研究課題「近代中央ユーラシアにおける歴史叙述と過去の参照」

2021年度第1回研究会

日時：2021年6月13日（日曜日）14時00から17時00分

Zoomによるオンライン開催

当日のプログラム

1. 近藤信彰（AA研所員）

「近代イランにおけるテュルク的過去の参照」

2. 小野亮介（AA研共同研究員，早稲田大学）

「ゼキ・ヴェリディ・トガンの著作における過去の参照(1925-1933)」

3. 全員

討論

参加人数：22名（日）

報告

本研究会は、近代以前の中央ユーラシアにおける歴史叙述の系譜について考察し、それが後代の歴史認識・解釈に与えた影響を議論するものであった。そのような影響関係にかかる近代における認識について、イランとトルコの事例を検討する機会となった。以下、各報告の概要を示す。

## 近代イランにおけるテュルク的過去の参照

近藤信彰（AA研所員）

前近代において中央ユーラシアとイランはテュルク・モンゴル系王朝の支配など歴史のかなりの部分を共有している。また、イランは現在人口の2割程度のテュルク系人口を抱え、数的にはいくつかの中央ユーラシアの国々を凌駕している。このような条件において、19世紀から20世紀前半のイランではテュルクに関わる過去がどのような形で参照されたかを論じた。具体的には、ガーエム・マガーム(1779-1835)、エウテマードッ=サルタネ(1843-96)、キャスラヴィー(1890-1946)の著作を取り上げ、それぞれがテュルク的な過去をどのように扱ったかを検討した。

まず、ガーエム・マガームの『帝王の姿と王侯の徴』(1834年以前執筆)を取り上げた。これはガージャール朝ファトフ・アリー・シャー（位1797-1834）の伝記として構想されたものであり、序文にはポスト=モンゴル期の神秘主義思想に基づいた神聖王権の考え方を色濃く反映し、散文改革者として知られる著者にしては極めて難解な文章である。しかし、ガージャール朝がテュルク系であるという認識は保たれ、ヤーフスの子トルクというテュルク系の始祖からオグズ24氏族までの系譜を書きかけたところで、途絶している。また、トルクについても、『王書』など

に登場するカユーマルスの同時代人として、説明されているのである。少数派であるテュルクの過去は、より知られている古代イランの伝説との関連で説明される必要があったのである。本作品が途絶している理由も、オグズ24氏族からガージャール朝へと繋がる系譜がうまく作成できなかったことによると解釈できる。

次に、エウテマードツ＝サルタネの『ナーセル整史』(1883年完成)と『アルサケス朝史における王冠の真珠』(1893年完成)を取り上げた。『整史』では第3巻冒頭でガージャール朝の起源にかかわる11の作品を紹介し、ガージャール族の始祖をラシードツ＝ディーン『集史』にも登場するジャラーイル部のサルタークの子ガージャールであるとする。しかし、参照したのは19世紀前半からのイランおよびイギリスの歴史家達の記述であり、それ以上遡ることはない。また、ガージャール朝の起源に対する興味は見られるものの、特に王朝の正統化とかかわる面は見られない。一方、『王冠の真珠』は、『王書』と同様の古代イランの4王朝叙述を踏襲し、その3番目のアルサケス朝史を明らかにしようとしたものである。しかし、その補遺において、アルサケス朝がテュルク系でガージャール朝の先祖であると主張する無名氏の作品を紹介している。これはアラビア語からペルシア語に翻訳されたものとされ、当時、国外で出版されていたアラビア語、テュルク語の歴史文献を利用したものであるが、極めて粗雑な議論である。ただ、興味深いのは、エウテマードツ＝サルタネのこの作品への態度であり、この議論に飛びつくのではなく、ガージャール朝の威光は先祖がアルケサス朝であるかどうかにはかかわらないと主張する。ガージャール朝にとっては、むしろ、このときイランを支配しているということ自体が重要であり、必ずしもテュルク的過去を利用する必要はないと考えたようである。

キャスラヴィーの有名な作品『アーザリー、アゼルバイジャンの古語』(1925年成立)は、アゼルバイジャンのテュルク化にかかわる文献として、これまで注目されてきた。彼の議論は極めて学問的なものであり、今日の通説のもととなったものである。しかし、本報告では彼自身が歴史的アゼルバイジャン(=イランのアゼルバイジャン)の歴史をテュルク化との関係でどのように捉えているかに重点をおいた。彼によれば、同時代のイスタンブルやバクーのパン＝テュルク主義的議論は、アゼルバイジャンでは受け入れられなかった。アゼルバイジャンの住民は現在でこそテュルク系の言語を話す、もともとはイラン系のアーザリー語という言語を用いていた。テュルク化はセルジューク朝期以降徐々に進み、サファヴィー朝期に頂点に達したが、現在ではむしろペルシア語志向が高まっている。立憲革命の経験はアゼルバイジャンがイランの一部であるという認識を強める結果となっている。キャスラヴィーの言は彼の強いイラン・ナショナリズム、テュルクという民族的自覚を否定して既存のイランという国家を優先する姿勢を見ることができる。少なくともこの作品が執筆された頃までに、テュルク的自覚を強調するような他の作品は知られていない。

以上の検討により、近代イランという環境において、テュルク的過去がどのように参照されたかが明らかになった。テュルク系の王朝や住民の存在は十分自覚され、テュルク的過去は時宜に応じて参照された。しかし、より大きなペルシア文化やイランという国家の前に、テュルク的過去は王朝史や民族史において副次的な役割しか果たすことがなかった。その意味で、テュルク

的過去が国家や民族の形成に大きな役割を果たしてきた中央ユーラシアとは大きく異なると言える。

## ゼキ・ヴェリディ・トガンの著作における 過去の参照(1925-1933)

小野亮介 (AA研共同研究員、早稲田大学人間総合研究センター)

本報告では、ロシア革命期にテュルク系ムスリムの自治を模索し、後にトルコに逃れトルコ学者として活躍したゼキ・ヴェリディ・トガン (1890-1970) が自身の著作においてどのように過去を参照したかについて具体的な事例を検討した。

本発表で取り上げたのは、テュルクの始祖伝説である「ウルハンアタ・ビティギ(ビティグチ)」およびエルゲネコン、イブラヒム・ケフェリ・エフェンディ『タタール・ハン、ダゲスタン、モスクワ、キプチャク草原諸国諸史』(実際にはオスマン帝国に仕えたボンヌヴァル伯によるロシアに関する報告書の不完全な写本)、ミール・イッザトゥッラーの中央アジア旅行記、カザフ民族の系譜、『インド誌』、『薬学の書』などのピールーニーの著作、ファサーイー『ファールスナマイェ・ナーセリー』、ヘルツフェルト『パイクリ』などである。

これらの事例から、トガンがイスラーム世界の様々な写本、地誌・旅行記だけでなく、ヨーロッパ諸語の研究をも利用している一方で、漢語資料については活用が不十分であることを明らかにした。また、彼が先鞭をつけた研究もある一方、先行研究への無批判、追従も見られる。トガンは総体的テュルク史の構築を目指し、民族的アイデンティティを模索したが、単なる研究者にはとどまらず、研究者としての側面がナショナリスト・反ソ主義者としての性格と併存していることをトガンによる過去の参照の特徴として挙げるができる。

報告後の討論では、「ウルハンアタ・ビティギ」の特徴、テュルクのシンボルとされることの多いオオカミの頭部をトガンがどう評価していたか、トガンの関心の広さと特異さ、彼のトルコ学研究の背後に控える政治性などについて質問やコメントがなされた。

総合討論では、近藤報告に対しては系譜の遡求がどの程度まで行われるのかについて質問が寄せられた。またイランにおける多民族性の意義もあらためて確認された。そのなかでキャスラヴィーの著作が示すように、テュルク的過去の参照、テュルク主義的な言説の占める位置が決して大きくないことが明らかになったと言えよう。

小野報告に対しては、トガンの著作・言説が持つ多元性に注目が集まり、トガンの研究の背景にある政治的な主張・民族主義的な主張・ロシア帝国との関係などを整理する必要性が明らかにな

った。

今回の2本の報告はいずれも中央ユーラシアの域外から歴史叙述・歴史認識を考察するものであったが、その一方で近代においては中央ユーラシア（コーカサスも含め）出身者がイランやトルコに移動・移住し研究・言論活動を行う事例も多く、相互の比較の意義を確認することができたと考えられる。この点も引き続き今後の課題としていきたい。

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.